

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成23年9月1日(第1208号)



発行／(社)秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306



絵／文 白澤 恵舟

東日本大震災被災地を視察

10団体の建設産業サポーターが参加

8月30、31日の二日間、秋田県の復興支援建設産業サポート事業を受託する10団体の職員、建設産業サポーター17名が同事業活動の一環として東日本大震災の被災地視察を行った。

復興支援建設産業サポート事業とは、東日本大震災の復興事業に当たり、被災地の労働力や資機材等のみでは迅速な対応が困難と見込まれており、東北全体で支え合うことが重要であることから、県内建設産業関連団体が「建設産業サポーター」を雇用。秋田県からの委託を受け、サポーターが被災地の企業・団体を訪問して県内建設産業が提供できる労働力・資機材等の情報を提供するとともに、被災地でのニーズを把握し県内建設産業に提供することにより、県内建設産業が迅速な復興に貢献できる環境を整えることを目的とした事業。



第1回目である今回の視察では、宮城県沿岸部を訪問。震災の折の津波により広域で浸水被害に遭った仙台空港を始め仙台市若林区荒浜地区、亘

理町、仙台・塩釜港周辺の現状を確認。視察先各所に見られる膨大な量の瓦礫、荒廃した農地、家屋の基礎だけが残る住宅街跡など、視察参加者はテレビ等報道による映像では感じ取れない被害の大きさを実感し、復興への道のりが長いことを改めて感じるようになった。



建設産業サポート事業においてはこのような情報収集活動を継続して実施、9月中には岩手県沿岸部の視察を予定している。また、視察レポートは協会ホームページ内「復興支援建設産業サポート事業」コーナーにおいてまとめ次第



秋田水風景

文と写真/加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴/旅の手帖、WoodyLife、ペンチャー・リンク、郷、あるる他
海外取材歴/ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写案 主宰/写真教室、撮影ツアー企画等

秋田内陸線 大又川鉄橋

〔あきたなほりくせんおおまたかわでつきょう〕

北秋田市阿仁萱草

Vol.26



秋田内陸縦貫鉄道の萱草（かやくさ）駅と笑内（おかしな）駅のあいだにある大又川鉄橋は、全国の鉄道ファンによく知られた人気の撮影スポットである。今回ご覧いただく写真では河原まで下りて列車を見上げて撮影しているが、線路とほぼ同じ高さのところを並行して国道105号が走っていて、その国道の橋の上から、鉄橋を渡る列車を撮るのが定番中の定番である。

列車の乗客の目線から見ると深い峡谷を渡る地点となり、車窓からのスベクタクルは比立内駅近くの比立内鉄橋とともに内陸線の二大白眉である。観光シーズンになると列車は鉄橋の上で徐行サービスをし、乗客は歓声をあげながら峡谷美を堪能する。これからの紅葉シーズン、そして水墨画の世界さながらとなる雪の季節には、多くの観光客が内陸線沿線の自然風景の魅力の虜になることだろう。内陸線は慢性的な赤字で経営が大変なよう

だが、私は逆にそれが不思議でならない。全国的に見てもこれだけの風光明媚な沿線風景を持つ鉄道路線は少なく、鉄道ファンのみならず、もともと多く多くの旅行ファンや観光客に知られてよいはずだ。まだまだPRが足りないのではないのか。秋田の人間からすると、自然の風景なんて「どこにでも転がっているもの」と考えがちで、それが観光資源になるとはなかなか思いつかない。もしかしたら、人工的な博物館や資料館などよりも、内陸線の車窓風景のほうが観光客にはよほど魅力的かもしれないのに。

内陸線の前身である国鉄阿仁合線は、鷹巣から阿仁合までは戦前の昭和11年に開通しているが、そこから先、比立内までは戦後の昭和38年の開通で意外に遅い。当時とすればこの大又川鉄橋の建設も大工事であったことだろう。廃線などにはしないで、永く楽しめる車窓風景であってほしいものだ。

技士会

優良工事従事の 会員技術者17名を表彰

秋田県土木施工管理技士会表彰

秋田県土木施工管理技士会（北林一成会長）は8月29日、秋田市ルポールみずほで表彰式を執り行い、技士会表彰規定により、優良工事に従事した会員の技術者（現場代理人）17名を表彰した。

受賞者は次のとおり。

株式会社 佐藤庫組	岸 野 雄 馬
秋田土建株式会社	園 部 信 悦
花岡土建株式会社	工 藤 正 伸
株式会社 佐藤庫組	中 嶋 清 巳
株式会社 伊藤羽州建設	日 景 義 点
平和建設株式会社	米 沢 淳 也
北部建設株式会社	長 岡 岩 夫
大森建設株式会社	館 岡 勇 人
成田建設株式会社	児 玉 政 人
秋田舗道株式会社	佐々木 孝 一
山科建設株式会社	佐 藤 保 一
コマツ建設株式会社	齊 藤 正 美
株式会社 宮原組	風 間 祥 壮
株式会社 最上田組	佐々木 橋 学
株式会社 沢野建設	高 橋 謙 治
ミノル工業株式会社	若 松 泰 明
大橋建設株式会社	遠 藤 淳



（財）建設業福祉共済団から

建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

放射能のツケは誰が払う？

藤原 優太郎

林でツクツクハウシが鳴き、ススキの穂が揺れ、アカトンボが舞い始めると秋だなあと思う。朝夕の冷え込みが間違いなく季節の移ろいを感じさせる時期になった。

そんな初秋、横浜市から遅い夏休みをとった若い家族が、私のいる山の中に遊びに来てくれた。もう秋だから避暑というわけでもないのだが、自然に抱かれて4日ほど過ごしていった。

日中の暑さも嘘のように、夕方になると吹き抜ける風はまちがいなく秋のそれだ。肌寒さを通り越して「寒い！」というくらいである。

外で炭火を熾し新鮮なサンマを焼いて食べた。サンマはジュウジュウ油を滴らせながらほどよく焼けてゆく。

さてこのサンマの産地はどこだろう。これまでだと三陸の気仙沼か釜石というところだろうが、ついそんなことを考えてしまった。買ったサンマは結構値段が高かった。

3.11の東日本震災と原子力発電所事故のあと、太平洋沿岸の漁業事情は大変な事態に直面している。もちろん漁業だけではない、農産物から酪農製品まで、風評被害を含めて食料事情が大きく様変わりしている現状に唾然とする。

原発事故に対し、当初、日本政府は、「健康に直ちに影響するものではない」とし、学者先生たちもそれに追従した。半年も経った今では、さすがにそんな能天気なことをいう人もいなくなった。直ちに影響はないというなら、いつになったら影響が出てくるというのだろうか。

子どもの頃、太平洋のビキニ環礁でアメリカが水爆実験を行ったとき、日本のマグロ延縄漁船の「第五福竜丸」が被爆した事故を知る人はもう高齢の人だけになった。その頃は、雨が降って放射能に触れると頭が禿げるとか、「原爆マグロは食うな」などもっばらのうわさだった。「黒い雨」という映画も話題になった。唯一の被爆国である日本の広島、長崎の原子爆弾は無論、スリーマイル島やチェルノブイリの原発事故が世界を震撼させたことはまだ記憶に新しい。

原子力発電というものにこれまで私たちはあまりに無頓着だった。現代的な生活の中で、便利さや快適さだけを享受し、核や放射能の怖さなどは、意識外のこととしていたような気がする。

電気をはじめ、化石エネルギーなどの無駄づかいがどれほど膨大なものだったか、すべて他人事のように、ほとんど誰も意識して来なかったのではないだろうか。

福島での原発事故のあと、どうしても腑に落ちない、理解できないことが頭から離れない。被災地では学校や幼稚園の土壌汚染が問題になり、その除去と徐洗が当たり前のように行われている。剥ぎ取った表土や洗浄した水など(原発の冷却水もそうだが)はどこへ行くのだろうかという単純な疑問である。

物理学の基本である「エントロピーの法則」を含む「熱力学の法則」によれば、「あらゆる物質の総量は一定で、どのように形を変えても、無用なものになり本質的な質量は変わらない」という。つまり、汚染された土壌や水は姿かたちを変えこそすれ、絶えずどこかに存在するということである。仮に一時的に目に見えないところに処分したとしても、その悪者は地球上のどこかに必ず潜んでいるということである。

それが放射性物質や核廃棄物となれば、問題はさらに深刻で、これはもはや人知を超えており、科学の力などでは絶対というほど解決できないといっても過言ではないだろう。こんな悩ましい問題を、「直ちに健康に影響するものではない…」などと、政治家はなんと無責任なのだろうと思ってしまふ。早く安心してサンマを食わせてほしいものだが、無理だろうなあ。

